

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十八年七月度 入選句 (投稿総数二千七百九十八句・一般投句数七百二十四句)

特選

選者 名和 永山

梅雨 深し内緒のはなしは糸電話

大垣市

安福 けい子

「梅雨深し」雨の日が続き、心もスッキリはしない。モヤモヤした気分が続く。心がしずむ。面白くないことばかり。この暗い気持ちを誰かに話したい気分。内緒話でよい。

「内緒のはなしはあのねのね」の口調を思い出す。「内緒のはなしは糸電話」なるほど、糸電話ではなしをするのもいいだろう。

「内緒のはなしは」の中人は、気分がスッキリしていない、はみ出した心の様子が浮き出ている。どんな内緒話をしているのか気にかかる。読者はそんな想像をする句である。

引越しも数の力よ蟻の道

不破郡垂井町

児玉 信子

無数の蟻で作られている蟻の道。引越しには頭数がほしいのは誰しもある。少しでもお手伝いがほしい。

蟻は地上の餌を一匹が少しずつ、また一匹が少しずつと、たくさんさんの蟻が次から次へと巣に運ぶのである。まさに餌の引越しである。そう、たくさんさんの蟻で運んでいるのである。

「引越し」に「蟻の道」の季語が生きている。

螢追ふ小さき姉妹はセピア色

羽島市

伊藤 みさの

小さき姉妹が目の前にいる。その光景は自分たちの小さい子ども頃の思い出と重なるのである。きつと懐かしい風景であろう。丁度アルバムの写真が、セピア色に変わるほどの昔の思い出である。

きつときつと仲良しの姉妹なのである。「あっちへ飛んでいった。」「よし、追いかけてよう」そんな言葉が聞こえてくるようである。

秀逸

柿若葉 嬰の足裏しつとりと

不破郡垂井町

北村 廣美

強面をかくす術なき女郎蜘蛛

大垣市

棚橋 みさを

黴の香や父の遺愛の皮ベルト

養老郡養老町

田中 紫香

足るを知り小さき畑に夏やさい

大垣市

安田 むつこ

豆腐売ラツパ途切れて路地薄暑

不破郡垂井町

西田 厚堂

叱られて箸で刻みし冷奴

大垣市

宮上 美濃留

夏つばめ翻へり濤裏返す

岐阜市

堀江 美州

大宴会しめはやっぱり鮎ぞうすい

大垣市

古澤 奎子

齢重ね罪を重ねて夏祓

大垣市

北浦 典子

蛩とぶ水音闇を深くせり

不破郡垂井町

高木 巧み

入選

湧水をみやげに帰る梅雨晴間
ががんぼの足数へては玻璃の内
万物の生けるもの皆春を待つ
麦秋や風神すがた現せり
信念を通して今日の冷奴
軽々と憂さ払ひたる若葉風
一番茶つむ指さきのネールかな
夏帽子にふつと去年の陽の香り
十葉を避け走り去る迷ひ猫
一村は紫陽花色の風の中

揖斐郡池田町 木塚 由美子
福井県敦賀市 山田 美千代
大垣市 寺澤 弘
埼玉県北本市 栗原 華子
大垣市 宮上 美濃留
大垣市 吉田 てるみ
大垣市 岩田 正
大垣市 伊藤 鈴子
大垣市 北島 暁子
大垣市 岡田 あや子

入選

余生にもいろいろありて葱坊主
勝手口帰らぬ父の麦わら帽
蔦茂る土蔵の屋根の反りかげん
白雨去り雲間に現るる空の色
白日傘仁王の前でたたみをり
十年の写経 柩へ額の花
白紫陽花赤子乳房を含みをり
しっぽたつ鮎の塩焼き二匹食べ
土叩く度に歓声西瓜割り
メモ書きの擦れた文字も半夏生

大垣市 鶴田 信子
大垣市 片山 洋紅
大垣市 中山 あや子
大垣市 野村 多佳子
大垣市 平野 きぬよ
岐阜市 伊藤 瑞実
安八郡神戸町 大槻 恭子
大垣市 原田 嘉芽子
大垣市 早崎 美弥子
三重県鈴鹿市 松井 政典

選者吟

炎天や金の鯨反りを増し

永山